ビブリア

発行　いわき市平上荒川字長尾30
福島工業高等専門学校
図　書　委　員　会
昭和62年10月5日

No. 62

福島高専 図書館報

◈ 巻頭言 ◈

❋犬が星を見る❋

工業化学科　伊　藤　正　之

目標もなく、意欲を失い、何を見ても感動しない、知的仮死状態を外国では「犬が星を見る」という。

人間だれでも想像に絶する能力を発揮できるのに。人生は一度だけ。なんとか自分の能力を磨きフルに発揮したいものである。

自己啓発の基本として、ＩＢＭ社では、Ｒｅａｄ（本をよく読め）、Ｌｉｓｔｅｎ（人の話しを聴け）、Ｄｉｓｃｕｓｓ（隣人と話し合え）、Ｏｂｓｅｒｖｅ（事物をよく観察せよ）、Ｔｈｉｎｋ（そして考えよ）、をあげている。

これは（Ｒｅａｄ＋Ｌｉｓｔｅｎ＋Ｄｉｓｃｕｓｓ＋Ｏｂｓｅｒｖｅ）×Ｔｈｉｎｋで表わせる。

「本をよく読んで考え」、……「事物を観察して考え」である。

だれでも解る単純で基本的なことである。迷ったときは基本に戻れといわれる。

Ｒｅａｄだけでなく、各基本のバランスをよくとらねばならない。これらを活発に行うことで、新しい発見が、意欲が、連鎖反応的に増大し、自己成長につながる。

また、若人は積極的な考え方、積極的な行動をしなければならない。つぎの小話しがある。

Ａ、Ｂ、二人のセールスマンがアフリカに靴のセールスに出かけた。現地で皆ハダシをみて本国へ打電した。

Ａ君は「皆ハダシ、ダメ、スグカエル」、

Ｂ君は「皆ハダシ、トリアエズ、イチマンソクオクレ」、この二人のいづれをとるか、私はＢ君をとる。

結果的に一足も売れなかったにせよ「とにかくやってみよう」という先ず行動するという考え方が大切と思う。

過去の天気をいくら調査しても、明日の天気を100％正確に予測できない。

世の中は動であり、思考は静である。若人は失敗しても先づ行動することが大切。五感をフルにそして体を使うことが大切。行動して考え、考えて行動する。これにより五感が磨かれ能力が伸長する。本を読んだだけで解らぬことが氷解する。

最近、「犬が星をみる」タイプの若人が多くなりつつある。これを直すショック療法はないものか。

やはり、基本に忠実に行動することであろう。学校は、毎日、階段を登るように授業で新しいことを学ぶ。また多くの友人、上下級生、教職員のもとで、すばらしい学園活動が行われている。

「日々に新たなり」、昨日より今日、今日より明日は！

各人が、あらゆる事象にＩＢＭの５つの基本をとりこんで、自分の生き甲斐をより強く感じるよう生活サイクルを築きあげるべきではないか。

随　想　極遠をめざしつつ地歩を固めよう

❋大勢に逆らう❋

一般教科　渡　辺　洋太郎

今年の終戦記念日８月15日の朝日新聞のコラム「天声人語」は鋭い問いかけを載せていた。それは読者から寄せられた戦争体験の投書をまとめた本「戦争・血と涙で綴った証言」の読後感である。そこでとりあげた一つの状況は、国内での消火訓練の場面であるが、「非国民」とされた外交官の家に水をかけろと命令され、水びたしにしてしまう話である。もう一つは、無実と思われる中国少年を救いたいが命令により処刑の場に立ち会わざるをえない話である。いずれの場合もその行為の非を知りながら、国賊だと村八分にされることを恐れ、あるいは命令に背いた結果への恐怖から敢然と反対を表明できず、大勢に順応する楽な道を選び、結果的に戦争に協力したことになると指摘している。

戦争のような大事でなくとも、これに似た状況は今日のわれわれの周辺にも見受けられる。東芝機械のココム違反事件に関しては、社内に反対を唱える声もありはしたが、会社の方針として消されたとのことである。内部告発の挙に出る者がいなかったため、一挙に大きな痛手を受けることになってしまった。また学校内のいじめにしても、周囲の者が大勢に抗う勇気をもてば、被害者を自殺に追い込む悲劇を避けることもできよう。

しかし、「順応しまいと思った時の肉体的恐怖感は私たちのはだにしみこんでいる」と「天声人語」が結んでいるように、大勢に抗うことは、時には死をも覚悟しなければならぬ程の難事である。日本人は特に和を重んじ、異議を唱えて事を荒だてることを好まないと言われるが、大勢に順応する楽な道を選ぶことは人間の本能に内在する性格のものであろう。

一方、その本能に背を向け、正義のために殉じあるいは隣人愛に生きる人も少くない。先の太平洋戦争中も軍部の弾圧に屈せず、獄中でも節を曲げなかった思想家もいるし、満州進出を帝国主義的植民地政策と批判して大学教授職から追われたが、戦後再び復職するよう請われた人もいる。ナチスドイツでは反ナチの人々が秘密組織を作り抵抗運動を展開した。

これらの人々に大勢順応を拒否させるものは何だろうか。生まれつきの強い正義感や反抗心なのか。あるいはそうかもしれないが、大切なことはその時々の大勢の中に正義があるか否かを鋭く見きわめることであろう。世に正義などはなく、多数が正義だとうそぶく人もいようが、その末路の哀れなことは歴史の示すことである。ところが正義の道を知りながらも、人はなお村八分の恐怖から逃れられず、大勢に身を投ずるものである。とすればこの人間の弱さをしっかりと見据えておくべきだろう。

キリスト教をパレスチナのユダヤ教の一分派の位置から当時の世界帝国たるローマの国教にまで弘める原動力となる命がけの大伝道旅行を三度も敢行した使徒パウロにして、この告白をしている。「私がしたい善はやれず、私がやることは意に反する悪である。……私はなんとみじめなのだろう、だれが私をこの死に値するからだから救ってくれるだろう」（ローマ人への手紙７章）と。このパウロを生かしたのは、キリストの人格と行為を通して示された神の愛であるという。「神はその独り子を惜しまず、われわれすべてのために与えられた。……それなら何がわれわれをキリストの愛から離れさせえよう。悩みか、苦しみか、迫害か、飢えか、裸か、危険か、剣か？」（同８章）、この神の愛を確信して、彼には何も恐れるべきものがなかったという。

パウロはキリスト教信者迫害の旅の途中、電光に打たれたことを契機としてキリスト教へ劇的回心をしたという。人それぞれ歩む道はさまざまであろうが、大事に臨んでは謙虚に自己を反省し、正義に背くことがないか、何が他のためになるかを思いめぐらし、かつその善を実行に移すべき力を祈り求める姿勢を持ち続けたいものだ。大勢に流されないために。

❋今の私は味噌こし型❋

土木工学科　山ノ内　正　司

ある新聞に英国の詩人コールリッジのことが書いてあった。彼は本の読み方を4つのタイプに分けたという。（実は私がこの人のことで知っていることは皆無に等しい。普通、論文等で他人の言葉を引用する時には、出典を明らかにするのが常識であるが、ここではそのまま引用させていただく。）

① 砂時計型。何も残さない。そして一冊の本を時間つぶしのために読み通すことで満足する。

② 海綿型。読んだものを全部吸いとり、それをほぼ同じ状態でもとに戻す。ただ少しばかり汚れただけで。

③ 味噌こし型。読んだもののかすだけ残す。

④ モガル・ダイヤモンド型。稀にして貴重。読んだものによって益を得、かつそれによって他をも益する。

私の出張時の車中では砂時計型に徹し切っている。夢うつつの中でただ活字を追っているに過ぎず、これまでどの様な本を読んだのか、実際何も残っていない。又再び読んでも感動できる余地は残っているが、特に試みたこともない。読み残しがあってもそのままで、訳もなく本棚に本がたまっていく。

海綿型と聞いてすぐに思い浮かべるのが、某学生の試験中の姿である。とにかく徹底して吸いとる。それも驚くばかりの速さで。しかしもとに戻さないと、次のものが吸いとれないという悩みをもっている。

世の中まさにコンピューターブームである。8ｂｉｔから16ｂｉｔへ変わったのがつい先日の出来事で、どうにか状況をつかみかけたかなと思えば、もう32ｂｉｔの時代に突入している。また、ＵＮＩＸ、ＴＲＯＮ、ＯＳ／2、ｅｔｃ、今後の主流となりそうなソフトウェアーの記事が自白押しである。ハード・ソフトの進歩に遅れまいとして情報収集のための読書は努めているが、本来は土木屋、細かいことはわからない。結局、味噌こし型で終っている。

先に挙げた前三者の読み方は、人生に多少の彩りを添えてくれることがあっても、自分の人生と深くかかわってはこない。

私が学生時代を過ごした20代前半頃までの読書は、現在と大きく違っていた。少なくとも、今以上に渇いていた。「なぜ」に対する解答を見い出したくて、むさぼり読んだ。またいつか、あの様な時が来るに違いないと確信している。良い本に出会えないのは、ある意味では不幸であるが、そのような人は良い本に出会う時が来ていないように思える。問題は読む側の渇きである。文学書を手にしても渇きがなければ、砂時計型程度の読書に終ってしまう。長い人生、何度か渇望する時が来る。モガル・ダイヤモンド型の読み方ができる本に出会える。もしかしたら、その本は、何年も前から自分の本棚にあったのかもしれない。本にだって、読まれる側としての権利がある。

私の読書

❋『人間失格』を読んで❋

機械工学科１年　加　藤　　聡

著者である大宰治の自殺以後に発表されたこの作品は、一人の人間のありのままの姿を見、著者自らの訴えを聞いたものであった。

人間恐怖症にも似たものが私の心の中に存在するように思う。例えば誰かが、意見を出したとする。その意見にみんなが賛成する。しかし、私はその意見に反対であったとしても、みんなに合わせて賛成する。つまり、自分一人だけが、他の友達たちと違った気持や考え方を持っているのではないだろうか、という心配と、そのことを人に知られたくないという孤立感の不安から逃れるため、人に対しての同意や共感が生れてくるのだと思う。

そんな私は、葉蔵と一体化したような錯覚を感じた。それは、「人間に接する事の恐怖感」といったものが、一致していたからである。しかし、

そういう気持を持っているにもかかわらず、平気で毎日を過している自分と葉蔵とでは、全く対照的な人間であった。「自己嫌悪のかたまり」葉蔵はそんな男だと思う。

（人間の生活の程度の見当がつかない。人間の営みというものを知らない。みんなは、どんなことを考えて生きているのだろう。）と鍵をかけて黒いカーテンを閉めていた彼の心の中は、こういう思いでいっぱいだったに違いない。そして、そのような心で過した彼の人生は、どんなに暗かっただろう。

それでも、葉蔵は、極度に人を恐れながらどこかで人間を思いきれない気持があったのだ。そんな気持を、「道化」という道が彼を変えたのである。「道化」というものは、実に恐ろしいと思った。なぜなら、本当の自分の姿を隠すことが出来るからである。この手段を使って彼は、人間に接することに成功したのである。幼い頃、勉強が出来るということで、尊敬されつつあった葉蔵は、学校の友達たちを笑わせることで、人間と接する機会を得た。又、一言も自分から口を開けなかった家庭内では、ばかな格好をして皆を笑わせていた。確かに人間と接することはできるだろうが、この時にだけは葉蔵は不安、いらだちといったものを、感じていたに違いない。

彼はまさに「お道化役者」に完成されつつあった。しかし、まわりの人々と何もかもがくい違っている不安は、まえと少しも変化がないことを彼自身が一番気付いていただろう。本来の自分の姿にもどると、真夜中、てんてんし、呻吟し、発狂しかけたのではないかと思う。勉強も出来て絵の才能もあった葉蔵は、結局、粗悪な雑誌の無名の下手なマンガ家になり、アルコールにおぼれ、女と遊びほうけてモルヒネにも手を伸していった。「人間失格」は葉蔵のような人間を指すのだろうか。もし世間が葉蔵の心の内、いわゆる人間恐怖を知ったらどういうだろうか。「そんなことは一人で悩まないで誰かに相談すれば気も楽になるしさわやかな生活がおくれるよう。」などときれいごとを並べるだろう。しかし、けしてそんなふうにはいかない。そう快さなんて残るわけがない。葉蔵が世間にうちあけたとして残るものといったら「恥」以外の何ものもないのである。そして、白い目で見られる生涯は当然のような気がしてならない。世間もそういう結果が分かっていながらうわべだけの気づかいで、無責任なことをいっているのに違いないのである。実際には、「個人」という一人の人間に対応している「世間」という団体に対しても、一人一人が葉蔵のような不安と恐怖をもって生活しているのだと思う。その場、その場の人間の対応をうまくきりぬけられなかったために、一人だけとり残されたように感じていた葉蔵は、とてもみじめである。

大宰治は、この「人間失格」を最後として自殺したが、彼の分身が葉蔵という架空の人物に生き続けているのである。だから、生々しい人間模様が直接的に伝わってきた。

これからの人生、多種多様な人々と共に生きてゆかなければならない人間社会である。私はこの本で人間と共に生きるということは、表面ではなく、人間の弱さ、お互いの弱さを知りながら生きていくことだと教えられた気がした。これから何年後かに、私は社会人になり、じかに世間に接する時、それは「世間」という団体に対して恐怖と不安を抱く時である。そんな時、この作品が役立つのを私は信じている。

❋『それから』を読んで❋

電気工学科1年　坪　井　正　光

代助の生き方に、深い興味を持った。しかし、僕は、友情の名の偽善の下で、愛する人をあきらめようとする気はないし、また、三年後、その友人を裏切るようなまねはしないと思うし、また絶対にしたくない。代助はこれを、やってのけた。それは、働かず毎日のらりくらりと過し、社会というもの、世界というものの厳しさに触れることがなかったためではないかと思う。つまり彼は、平岡のいうとおりの坊ちゃんであったため、全てがあのようになってしまったんだと思う。

僕は、代助を自信家であると思う。自信家だからこそ、三千代に告白したのだと思う。僕は、彼の半分ほどでもいいから自分自身に自信を持ちたいと思う。

一番印象的だったのは、終末の代助が燃えるような赤の世界に身を投げ入れたところだ。興奮をひきおこす、強烈な赤の世界に身を投じた場面はそれまでの平穏な日々から、社会の荒波に呑まれていく代助の未来を暗示しているかのようである。

真の愛を貫こうとするがために、人の道をはずれてしまった。三年の後、友情の裏切りという代償を支払うはめになるくらいだったら、最初から素直に、この二人が結ばれれば何ら問題はなかっ

たのではないかと思う。

代助の、「僕の存在にはあなたが必要だ。」というセリフが、三年早かったら、悲しみのクライマックスが、変ってしまっていたと思う。

代助が平岡のためを思って、身を引いたところから、全てが狂い始め、そして自ら破滅の道へ踏み出したのだと思う。しかし、愛する者のために自分の全てを捨て去ろうと決意した彼に対しては敬意を表したい。僕は、そのような行動を起せるかどうか、自分では分らない。もしかしたらそのような行動は、起せないかもしれない。僕はそこまで他人を愛しいと思ったことは、かつてないのでその時まで、最後の答はとっておきたいと思う。

この作品の不幸は、全て代助の利己主義から来たものではないかと考える。三千代に愛を告げる時、少なくとも二人の人間の立場が崩れたはずである。一つは、平岡の立場であり、もう一つは、三千代の立場である。また、代助の家族が多大な迷惑を被ることとなることぐらい容易に想像がつきそうなことだと思う。知識があったところで、それを、実生活で応用ができないのだったら、ただの能無しと同じだと思う。

僕は、この本を読み終えてから夢を見た。それはこんな感じの夢だった。ふっと気づくとまわりは、だれもいなく、闇がどこまでもどこまでも続いていた。となりを見たら、中学校の頃好きだった娘がいた。すると、闇は闇でなくなっていた、という内容だった。多分これは、「それから」の世界が、あまりに強い印象を与えたから、こんな夢を見たのだと思う。

代助の非を、一概には否定することは僕にはできない。なぜなら、第二の代助となる可能性を、十分に秘めているからである。代助の存在を否定することは、自身を否定することになる。例えば自分以外の人間の存在が下等なものであると感じる時がある。また、自己の欲望のためだけに、夫や子のある女性に愛を告げるかもしれない。あるいは、女性のために、大金を調達しないとも限らない。もしかしたら、代助は、僕自身の将来かもしれない。そうでないとは、はっきりいい切れない。しかし、僕は代助のように、チャンスをみすみすとり逃し、不幸に陥るような真似はしたくないと思う。

僕は、すっかり代助に感情移入をして、読んでいった。だから、平岡のとった、代助の行為に対する報復が、非常に腹だたしかったし、平岡を陰険な男だと思った。しかし、彼が、実は最も深い悲しみを背にした人間だと気付いた。信用すべき二人の人物から裏切られた彼の胸中ほど、悲しみの色に染まったものはないと思う。

僕は、自身の手で、自分の「それから」をつくりあげたいと思う。僕の物語は、ほんのプロローグにすぎない。エピローグはまだ遠い。

❋『坊ちゃん』を読んで❋

土木工学科1年　上野台　英　孝

十ページほど、文章を読むと、何故この本を今まで読まなかったんだという、後悔の気持ちで、頭の中はいっぱいであった。『坊っちゃん』といえば、誰もが知る名作中の名作である。そのためアニメに映画にと、よく映像化される。僕は、その絵を見て、声を聞いただけで、『坊っちゃん』を知りつくしたような気になっていた。

活字が紙をうめつくしたようなものは、大嫌いな僕であるから、文庫本などというものにも、振り向きもしないたちである。そのため、いくら名作といえども、読む気にはならないのであった。しかし、高専に入学してからは、あらゆる学科において、本を読むように勧められるのである。その中に、国語の夏季休業課題の、読書感想があったわけである。常識的に、感想を書くには、本を読まなければならない、だが、前にも言ったとおりに、本を読むのは、大嫌いなのである。したがって、どうしようと悩んでいるときに「はっ」とひらめいたのが、中一の時に買っておいたままになっていた『坊っちゃん』の感想文を書くことであった。

読んだほうが、得をするとよく勧められた本であったが、読まなくとも内容は、ある程度把握しているつもりだった。しかし、いやいやながら読みはじめた『坊っちゃん』は、今まで知っていた『坊っちゃん』とは違っていた。それどころか、明るく、新鮮で、なんとも壮快な気持ちにさせてくれる文章に、僕は、感動しないではいられなかった。とにかく、面白いのである。今までこんなに胸を弾ませて、読んだ本は、そうなかったと思う。結局、自慢ではないが、文庫本を一日で読み終えたことのない僕が、一日目で読み終えてしまったのだ。もちろんのことながら、最高にこの本が気にいってしまったのである。そして、今まで読もうとしなかった自分を後悔しないではいられなかった。なぜなら、僕の人生が百八十度変わっ

ていたかもしれないのではと思うからである。

一本筋の通った、男のなかの男の話は、最高であった。一本筋が通った男だからといって、やくざ者の話ではなく、僕が希望する職業ベスト3に入る教師の話であるし、いたずら好きでけんか好き、父や兄には嫌われるが、下女の清がよき母親的存在という生活環境の中で育った坊っちゃんの曲がったことが嫌いで、人並はずれた負けず嫌いで、その上、めんどくさがりやな性格が、僕を、『坊っちゃん』の世界の奥へ奥へと、引きつけていくのである。

・・・けちなやつらだ、自分で自分のしたことが言えないくらいなら、てんでしないがいい。証拠さえあがらなければ、しらをきるつもりでずぶとくかまえてやがる。おれだって中学にいた時分は、少しはいたずらしたもんだ。しかし、だれがしたかと聞かれたときに、しりごみするような卑怯なことは、ただの一度もなかった。した者はしたので、しない者はしないに決まっている。おれなんぞは、いくら、いたずらをしたって潔白なものだ。うそをついて罰を逃げるくらいなら、初めからいたずらなんかやるものか。いたずらも心持ちよくできる。いたずらだけで罰はごめんこうむるなんて下劣な根性が、どこの国にはやると思ってるんだ。金は借りるが、返すことは、ごめんだという連中は、みんな、こんなやつらが卒業してやる仕事に相違ない。ぜんたい、中学校へ何しにはいってるんだ。学校へはいって、うそをついてごまかして、かげでこせこせなまいきな悪いたずらをして、そうして大きなつらで、卒業すれば教育を受けたもんだとかんちがいしやがる、話せない雑兵だ。・・・と、そうとう長い『坊っちゃん』の一部だが、僕がもっとも気にいっている文章の一つである。なぜなら、この文章を読み終えた瞬間、人生のうえでのよき先輩に注意されたようなんとも言えない、気持がしたからである。また夏目さんが、主人公を通して、世間の魂い人間像を上手に表現していると思うきっかけとなったのも、この文章だった。ところが「罰があるから、いたずらをする」と文章から読み取ることができるが、よく考えると危険な考えでもある。なぜなら、いたずらがそれ以上だったとするなら、人を殺しても、罪をつぐなえば、気がすんですがすがしい気持ちになってしまうのでは、話にならないのであるから。

しかし、坊っちゃんのいたずらとは、本当に笑ってすみそうないたずらに過ぎないものであるから、読者の僕にとっては、読んでいて気持よいものであった。その上、罰を受けなくては、落ちつかないという、本当の人間らしさが、また一段と僕を引きつけるのであった。

さて、突然であるが、現代だけが、うそを上手につけるものが出世する世の中だと思っていたが昔も、そうであったとは、いったい正直者が悩まず生きてゆくことがいつできるのであろう。という思いに、明瞭に答えたような文章がこれだと思う。

・・・世間の大部分の人は悪くなることを、奨励しているように思う。悪くならなければ社会に成功はしないものと信じているらしい。たまに、正直な純粋な人を見ると、坊っちゃんだの小僧だのと、難くせをつけて軽べつする。それじゃ小学校や中学校でうそをつくな正直にしろと倫理の先生が教えないほうがいい。いっそ思いきって、学校でうそをつく法とか、人を信じない術とか、人を乗せる策を教授するほうが、世のためにも当人のためにもなるだろう。・・・と、いうのであるが、いかにも坊っちゃんらしい、きっぱりとした言い方で、不器用な僕にとっては、何度くり返し読んでも、実際に、そうなのだから、そうすればいいと、うなずいた上に拍手を送りたくなるくらいの賛成意見である。また、この文を読むと、誰となく文句を言って、すっきりしたときのような気分に、浸ってしまうのである。とにかく、『坊っちゃん』を読んでいると、不満という不満が、坊っちゃんの生きのよい江戸っ子の口調で、吹き飛んでしまうのに、快感を覚えずにはいられなかった。そして、また、今まで夏目漱石と呼び捨てにしていたのが、先生を付け加えなければ、失礼のような気になってくるのであった。

最後に、『坊っちゃん』によって、自分の今までの生き方を顧みてみると、どうであったろうか。だらだらと目標もなく、生きてきたような気がするし、言われたこともろくにやろうとせず、自発的でもない。結局、自分にとてもとても甘く、消極的な生き方をしていたように思う。

だが、『坊っちゃん』を読んでからは、今までとはちがう、何でも面と向かって立ち向かいたい気持ちが、抑えきれないほど、わき出てくるのである。よって、ここに勝手ながら、積極的に自分に厳しく生きようと決意するのである。また、こうすることによって、全力で一日一日を生きて、一度しかない人生を、充実したものに出来ると思う。きっとそうだ。今まで、何度もそう思ったが今回は今までとは違う気がしてならないのだ。

余談となるが、坊っちゃんの名前を知らないの

にくいが残る。しかし、それがよいのかもしれない。

❋夏目漱石の『三四郎』を読んで❋

機械工学科２年　滝　沢　　顕

漱石の作品では以前に「坊っちゃん」を読んだことがあり、興味もあったのでこの「三四郎」を読みました。「三四郎」は小川三四郎という主人公が熊本の五高を卒業して、東京の大学に入学するために上京してくるところからはじまります。三四郎は上京の列車のなかで本と、桃の好きな髭の男とに出合います。この二人に出合ったため三四郎は自分が人生体験にも乏しく、教養も浅い惨めさをいやというほど実感させられるわけです。自分の無力さを思い知らされた三四郎はそれだけ純粋に、東京での体験を受け入れることができるわけです。

上京後、さまざまな体験を重ねた三四郎は、ようやく、自分をとりまいている三つの世界ができあがっているのに気づきます。第一は、過去の世界、第二は学問の世界。では「燦として春の如く」輝く第三の世界は何かと思ったらそれは華やかな青春の世界であり、若い三四郎にとっては、人生そのものといってもよいものでした。三四郎は第一の世界を脱けでたと思っています。しかし、実は三四郎にとって、かれがいろいろ悩むときに、ただひとつの慰めを与えてくれる世界でもあります。第二と第三の世界は、三四郎にとってまだ未知の世界です。かれはこの二つの世界を往復しながらさまざまな人生体験を重ねてゆくわけです。第三の世界を代表するのは、やはり里見美弥子でしょう。彼女は明治という新しい時代の生みだした、新しい女性のひとりです。周囲のさまざまな条件によって動かされるだけでなく、自分の生きかたを自分でえらぶ、はっきりした自我をもった女性です。「三四郎」という小説の魅力は、小川三四郎という素朴な青年の心をみごとに描きだしただけでなく、美弥子に代表されるような新しい女性像を描きだしたところにもあるようです。

三四郎は美弥子に振りまわされながら、しかし確実に成長してゆきます。小説の最後の場面で、美弥子の自像画を見ながら、「森の女という題が悪い」むしろ「迷羊」と名づけるべきだという感想にたどりついているのは、三四郎が自分自身や美弥子らをふくめて、青春の不安定な生きかたを自覚したひとつの証拠だと思います。

素朴で純情な青年が、さまざまな経験を重ねて自分を成長させる姿を「三四郎」は、みごとに描いています。しかも、その背後には、青春が美しくひたむきであるけれども、そのゆえに持っている別のあやうさ、つまりあまりにも自己にとらわれすぎて、かえっておたがいに傷つくことの多いあやうさを見とおしたてんがあると思います。

❋『余興』を読んで❋

機械工学科２年　岡　部　信　一

作者・森鴎外。実にかたぐるしい名前だと思います。気まじめで、いつも〝ムッ〟としているような姿が想像されます。そんな人が〝余興〟を見て、聞いて、楽しんでいる場面を思い浮かべると思わず吹き出してしまいます。こんな軽い気持ちでこの本を読みだしました。

〝私〟は、作者自身ではないか。芸者に知り合いもなく、人中にいるのが嫌いで、独りでぽつんとしているほうがよい、なんて言っている人の性格と、僕の思っている作者のイメージが合っているからです。根暗で、人付き合いがあまり出来ないようなイメージなのです。

僕たちの世代の〝余興〟は、カラオケとか、特技とかを一人ずつ交代しながらやっていくものです。これなら十人十色で誰もがたのしめます。幹事が自分の趣味で他人に見せる〝余興〟では、〝私〟のように、おもしろくない人と、おもしろい人がはっきりしてきます。これでは、〝余興〟をやっている人も、おもしろくない人も、気分を害してしまい〝余興〟の意味がなくなってしまうと思います。やはり、見る人も、やる人も、気分が盛り上がらなければ〝余興〟にならないでしょう。

知りもしないのに、知ったふりをする。これを他人につつかれると、自尊心が傷つく。こんな、〝私〟を僕はとてもあわれに思いました。自分もたまにこんなことがあります。その時自分であわれに思うのです。自分の意志の弱さ、真の勇気のなさがこんなことを導きなさけなくなるのです。〝私〟も自らを省みたとき、僕と同じになったことと思います。今度からは、自分に厳しく、そして真の勇気を持とう、と自分に言い聞かせていきたいです。

他人がおもしろそうだから自分にもおもしろい、自分がおもしろいから他人もおもしろい、といった他人まかせの気持ちや自己中心の思いこみがあるようでは、必ず自分が後悔するように感じました。〝私〟が〝余興〟を見て感じたように。これから先、こんな気持ちが幾度となく自分の心にわきたってくることと思います。そんな時、この話が頭を横切り、この感想文で自分が書いたことを思い出すでしょう。

❋『あすなろ物語』を読んで❋

電気工学科２年　香　野　奈津恵

あすは桧になろうと念願しながらも、永久に桧になれない〝あすなろ〟の木。この〝あすなろ〟の木のように努力しながら生きている人間を、梶鮎太という一人の人間の幼年期から壮年期にわたってかかわってきた人々を通して描いている。

小学六年生の鮎太は、中学を受験するにもかかわらず、毎日遊んでばかりいた。その鮎太が、冴子という少女と、その冴子を通して知り合った加島という大学生によって、自分を見つめ直した。そして、加島に「克己」という言葉をささやかれたことによって、鮎太は変わった。それほど心を打たれた言葉なのだと思う。私は、今だに自分の人生を左右されるような言葉に出会っていない。そういう言葉に出会えるのはいつなのだろう。そして、その言葉によって、私はどう変わるのだろう。少し、考えさせられた。

しかし、その鮎太が中学時代にどうしてこう変わってしまったのだろう。頭の中には勉強のことしか入っていない。でも、この鮎太が、雪枝という一人の女性を通して、たいへん変わった。雪枝の努力もすごかったのだと思う。それに、鮎太の興味を持ったことには熱中するという性格もよかったのかもしれない。しかし、鮎太も無器用な人間で、両立というものができないのだ。難しいことだとは思うが、両立させて欲しかった。そうすれば、人生がもっと変わっていたかもしれない。

大学生となってからの鮎太は、何事にも熱中できず、ただ何となく毎日を過ごしていた。友人たちが桧となって飛び立っていくのを、ただ見ているだけなのだ。憧れの佐分利夫人に、「貴方はあすなろでさえもない」と言われたことも、あまり気にしていないようだ。これでは、人間として生きている価値がないと思う。せっかく生きているのだから、自分の一生を必死で送ったらいいのではないか。しかし、戦争に行ったことによって、この鮎太が変わったことには驚いた。何事にも無気力だった鮎太が、新聞記者として一生懸命に働いているのだ。私は新聞記者となってからの鮎太には好感が持てた。そして、左山町介、オシゲなどという一風変わった人との触れあいが、とても楽しかった。

私はこの「あすなろ物語」を通して、努力することのすばらしさ、生きていることの悲しさを知った。決して桧になれないとわかっていても、生きなければならないのだ。投げ出してはならないのだ。私もまだまだ、あすなろの木にさえなれない。あすなろの木に、一歩でも近づけるように、少しずつ歩んでいきたい。そして、私なりの人生を歩んでいきたい。

❋『こころ』を読んで❋

電気工学科２年　大　森　健　一

「恋は罪悪です」という主人公の言葉が最も印象に残りました。

この物語は人物名が全くといっていい程でてきません。全てが代名詞を用いて書かれています。ただし、本によっては一名だけ実名の書かれているものもあります。

主な登場人物は、主人公である「先生」とよばれる人、主人公を「先生」と呼び慕う学生の「私」主人公の妻、それと、主人公の親友であり自殺した「Ｋ」、物語は、この人達を中心に「先生と私」「両親と私」、「先生と遺書」の三部に構成されています。

物語は、「私」と「先生」の出会いから展開してゆきます。「私」は二度、三度と「先生」に会ううちに「先生」の不思議な魅力にとりつかれます。上・中は、このような「私」から間接的に主人公が描かれており、下は、「先生」の告白を中心に「先生」の自殺ということで終わります。人によっては非常にかた苦しくて退くつなものかもしれませんが、僕は、この作品を読むうちにむねをつかれるような思いを何度となく味わいました。ぜひ他の人にも一度は読んでもらいたいと思います。

僕が心を動かされたのは「先生」が『恋は罪悪

です。」といったときです。この言葉には「先生」の想いの全てがつまっているように感じられました。そして、今「私」に対して二の舞を踏ませたくないという想いを。

「先生」が前のような言葉を発したのは、過去の自分の経験に基づいてのものでした。書生時代「先生」とその親友の「K」は、現在の「先生」の妻である人を好きになります。「K」は、その想いを「先生」に打ち明けますが、同じく愛していた「先生」は、「K」の告白をきくと動揺し迷います。その結果、「先生」は、「K」を裏切り知られないように先にその女の人に告白をし、そして、受け入れられます。それを知った「K」は絶望のふちに立たされ、ついには自殺してしまいます。「先生」は最も信頼していたおじさんに遺産の大半をだまし取られ人間不信に落ち入り、立ち直りかけたころに、この事件が起こり自分をも信頼できないまま、明治の終わりを期に自殺します。

「先生」は、奥さんとの生活の中で「心」をひらこうとはしなかったように思います。きっと、「K」をおもっての事でしょう。

僕には、自殺するまでに悩んでいた「先生」の気持ちや「恋は罪悪です」といった気持ちが本当によく分かるような気がします。ただし、分かるような気がするだけで、もし僕が同じ立場に立ったのなら、こんなまねはしないでしょう。大体こうまでして手に入れた人を不幸にしようなんて出来ません。後のことを、残された人の事を考えなかったのでしょうか。また、「K」と「先生」との間に起こったことを奥さんに話しもせず、一人悩み、そして、何も告げず自殺してしまう。「先生」はこの事を、「妻の記憶を純白のまま保存したいため」だと書いています。しかし、これでは奥さんは「先生」の心にふれないまま一生を終えるのではないでしょうか。そんな生活に何の意味があるでしょう。この事が非常に残念に思われました。そして愛したのなら、また、それによってぎせいがでたのであったら、何故もっと愛し合わなかったのでしょうか、こんな事が言えるのも経験がないためかもしれません。でも、せめて悩みをわかちあって生きていくぐらいの事はできたでしょうに。

言葉でどんなに否定しても心の底では「先生」の言葉に共鳴したものが数多くあったし「先生」の過去に同情もしました。でも、やはり「死」で済ませてしまうのはあまりに無責任に思えたのも事実です。残念に思います。

最後に、この作品は僕の生活の中に一番影響を与える一冊になりました。

❋『時間』を読んで❋

電気工学科２年　猪狩孝洋

横光利一の作品を読もうと思ったのは、夏目漱石や森鴎外や井上靖は教科書などで読んでいるし福永武彦は書店には売られていなかったからだ。でも第一の理由は、教科書で見た横光氏の作品、「蝿」の文体がなんとなく変わっていて、この人の作品なら面白いだろう、と思ったからだ。

実際読んでみたら、面白いというより、悩んでしまう作品がいくつかあった。それは、それらの作品の題材が日常的なものだったから、そのため何を言おうとしているのかわからなくなったからだと思う。それとは逆に、題材がなんとなく難しくて、悩んでしまう作品もあった。

時間は、前者の方で悩んでしまった。話は、宿屋へ泊まった一座の座長が、皆を置いて逃げてしまい、金も持っていない残された者は、みんなでその宿屋から逃げ出し、やっとの思いで一軒の空屋に逃げ込む話だ。それだけだった。

でも、その間に、男達が女優のことでけんかをしたり、飢餓感が彼らを襲ったり、小屋の中では寒さと飢えと身体の痛みに眠気が加わって死にそうになる。

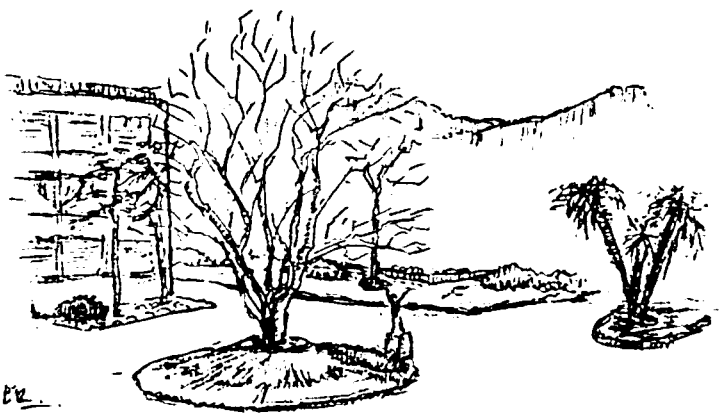
さっきは、この作品を読んで悩んだ、と書いたが、これらの場面はわかりやすかった。僕が横光氏の作品を読んでいて少なくとも解かった一つの点は、描写が豊かであることで、このため場面の状況がわかりやすかったんだろう。

一座の者達は、雨の中を宿屋の追手から必死で逃げる。お金も、十分な傘も、食物もなく、あるのはまさしく時間だけの彼らは、途中、食物の話に花を咲かせ、やがてはその一座の女優をめぐって男達はけんかをする。なるほど、僕達人間は、こんな極限状況下ではこんな行動にはしってしまうかもしれない。全く醜いようだが、仕方がないのかもしれない。

飢えや寒さのため眠ったら死んでしまう、と思った主人公は、みんなを殴り始め、殴られた者も今度は別の者を殴り始める。読んだ時には、ドリフターズを彷彿とさせるのりでなんとなくおかしくなったが、これも人間の醜い一面を描いているとも思った。

しかし最後は、たどりついた小屋のそばで水を見つけ、それを全員で協力して一人の病人に飲ませる。こんな場面を読むと、人間はやはりこういう生物なのだ、と安心でき、この作品は悩む必要もなく、面白く、味わい深いなあ、という気がしてきた。

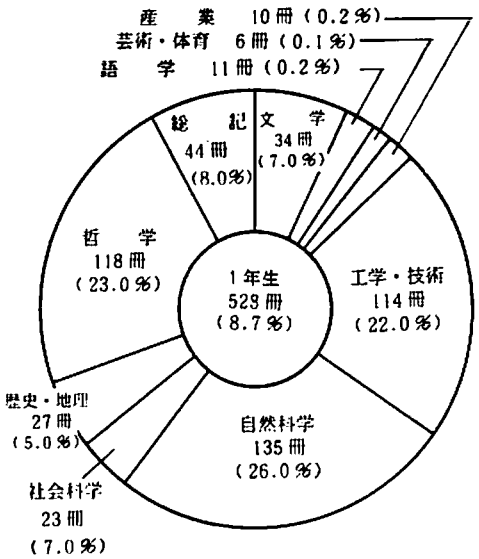
ところで、時間とはどういうものだろう。目には見えず、ないような気もするが、これが実際あるために、夏休みの終わりに近づいた今、こうして必死に感想文を書いていなければならない。時間は数えられるものでもないようだし、生まれてから死ぬまでの一本のものだと思う。しかし時間とは、生物や波のように向こうから迫まってくるもののように感じる。学校にいる時、迫ってくる時間は勉強であり、クラブの時、迫ってくる時間は練習である。この時間に向かっていき、乗り越えることで充実した生活が送れるのだ、と僕は、この作品を読んで感じたのである。

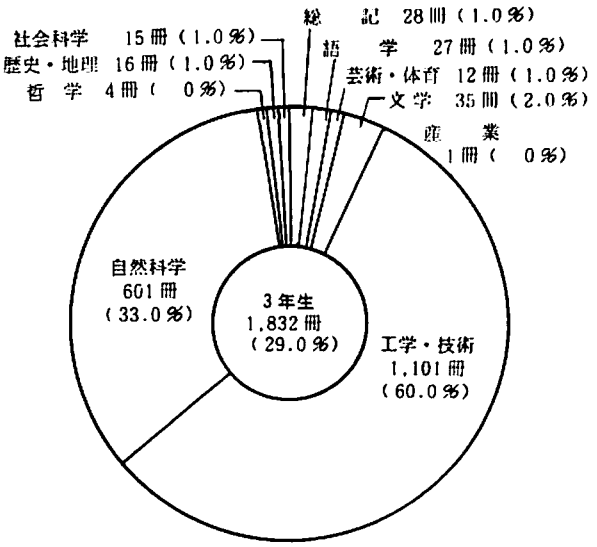


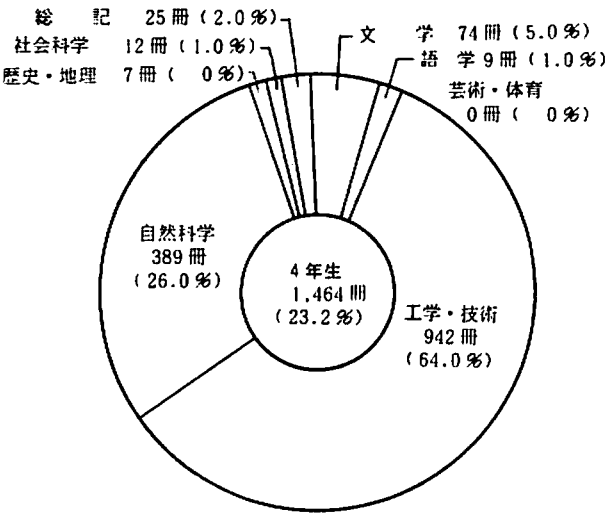
61年度　利用概況

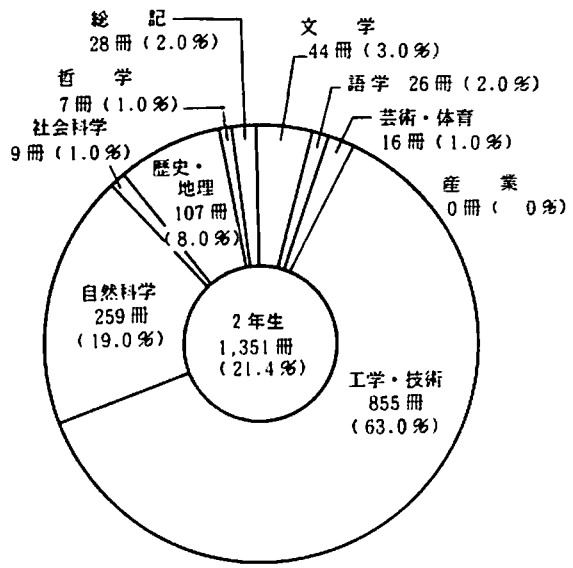
開　館　日　数	234日
総　入　館　者	37,289人
1日平均入館者	159人
1日平均帯出者	21人
1日平均帯出冊数	27冊

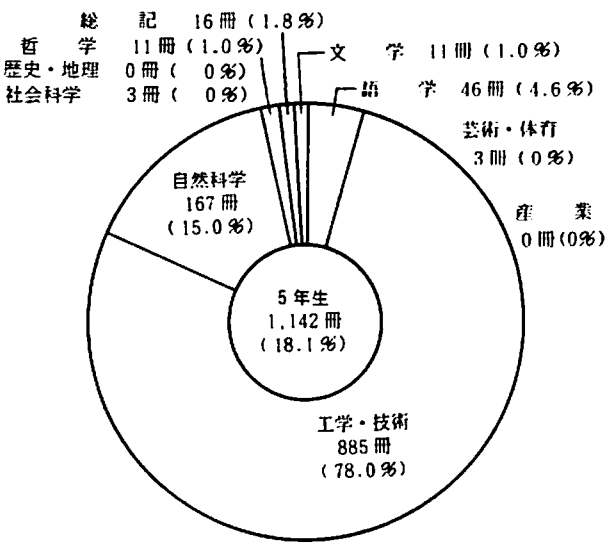
61年度　学年別・分類別利用冊数

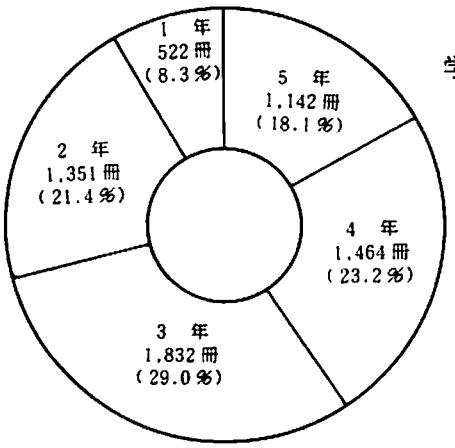










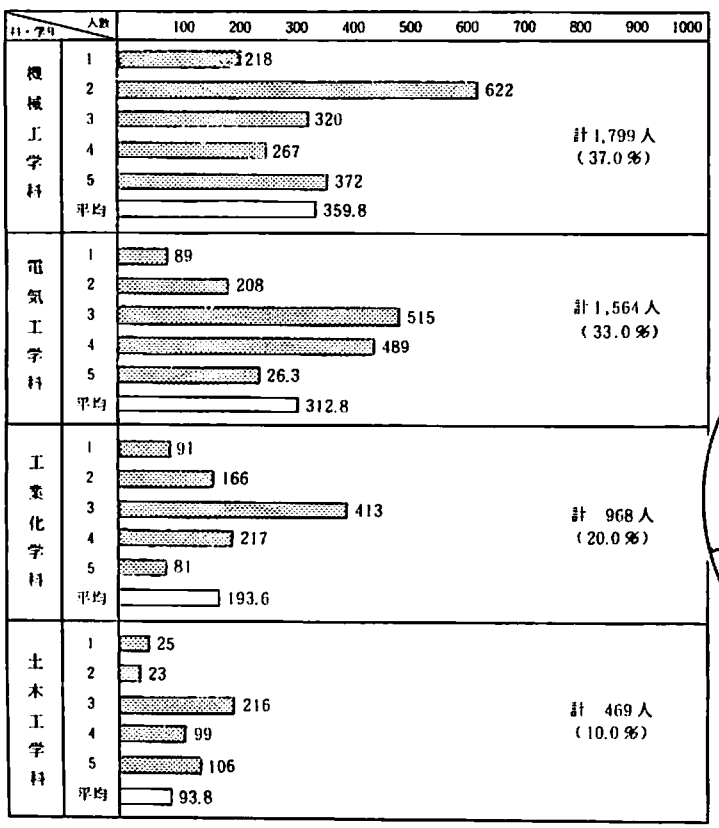


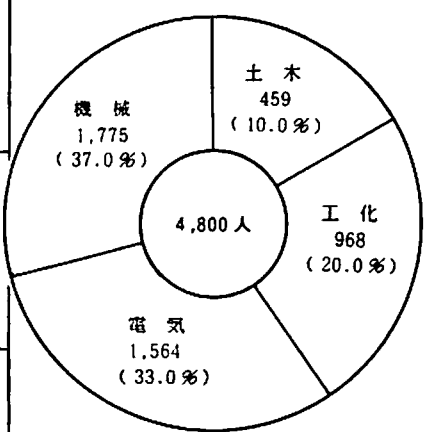
学年別利用冊数

利用人員（科・学年別）

学科＼学年	1	2	3	4	5	計	%
機　械	218	622	320	267	372	1,799	37
電　気	89	208	515	489	263	1,564	33
化　学	91	166	413	217	81	968	20
土　木	25	23	216	99	106	469	10
合　計	423	1,019	1,464	1,072	822	4,800	
%	9	21	31	22	17		100

利用人員（科別）





新　着　図　書　目　録

図書館に所在するものを
分類別受入順に記載

総　　記

朝日年鑑 1987　朝日新聞社
日本写真年鑑 87　日本写真新聞社
朝日新聞縮刷版 1～6月号　朝日新聞社
福島民報縮刷版 1～5月号　福島民報社
The New Encyclopaedia Britannica
Encyclopaedia Britannica
新訳漢文大系 23　易経　下　明治書院
東洋文庫　51　墨子　下
465　景德鎮陶録　1　平凡社
466　和漢三才図会　6
467　四民月令
468　曽我物語　1
469　八代集　3
470　科学史

哲　　学

太田哲男
大正デモクラシーの思想水脈　同時代社
小牧　治
和辻哲郎　清水書院
堀一郎著作集　5　未来社

歴　　史

日本の社会史　1.4.5.8　岩波書店
ドキュメント昭和　1～9　角川書店
角川日本地名大辞典　34　広島県　角川書店
長崎県
日本歴史地名大系　4　宮城県の地名　平凡社
10　群馬県の地名
大隅和雄
日本架空伝承人名事典　平凡社
高橋英彦
東アフリカ歴史紀行　日本放送出版協会

社会科学

樋口健夫
住んでみたサウジアラビア　サイマル出版会
松村陽子
働くの中のロシア人　朝日ソノラマ
キングスレイ・ウォード
ビジネスマンの父より息子への30通の手紙
新潮社
タイドマン
欧州のニューメディア　メディアハウス出版
大原社会問題研究所
社会労働運動大年表　I～III　別巻
労働旬報社
野間　宏
アジアの聖と俗　人文書院
野間　宏
日本の聖と俗　中世編　近世編　同
有光成徳
視聴覚教材の効果的利用法　同
学校社会教育施設における視聴覚機器の現状
日本視聴覚教材センター
佐賀啓男
教育におけるコンピュータ利用　同
昭和59年度文部省選定教材映画等目録　同
昭和60年度文部省選定教材映画等目録　同
日本教育年鑑　昭和62年版　ぎょうせい
日本民俗文化大系　別巻　総索引　小学館
乾　克己
日本伝奇伝説大事典　角川書店
民衆宗教史叢書　16　富士浅間信仰　雄山閣
19　金毘羅信仰
20　稲神信仰

自然科学

ブール
基礎数値計算　Pascal　マグロウヒル好学社
末沢富美子
物理学One Point　27　ブラウン運動
共立出版
三井清人
温度のおはなし　日本規格協会
田中久一郎
摩擦のおはなし　同
日本化学会
化学を楽しくする5分間　化学同人
泉　美治
化学のレポートと論文の書き方　同
竹本喜一
化学語源ものがたり　同
千原秀昭
化学英語の活用辞典　同
福富誠夫
化学者のための英語報文の書き方　同
泉　美治
増補化学文献の調べ方　同
酒井利夫
最新高速液体クロマトグラフィー I II
広川書店
不破敬一郎
最新原子吸光分析　I II　同
Levy
有機化学者のための炭素—13核磁気共鳴
東京化学同人
高野利夫
発癌遺伝子　講談社
Lechtman
分子生物学　ABC　化学同人
Lehninger
生命とエネルギーの科学　同
松平寛通
生物科学のためのアイソトープ実験法
東京大学出版会
中村　運
入門生命科学　化学同人
飯沢清男
水生生物と重金属　サイエンティスト社

工　　学

北山直方
新エネルギー工学入門　森北出版
花岡　裕
熱・流体のエネルギー変換工学　同
森　順夫
エネルギー変換の工学　共立出版
西川兼康
エネルギー変換工学　理工学社
牧田康雄
現代音響学　オーム社
新井泰司
パソコンによる製図　朝倉書店
神谷紀生
演習境界要素法　サイエンス社
足立吟也
無機材料科学　化学同人
材料テクノロジー　19　超伝導材料
東京大学出版会
堂山昌男
材料の評価システム　同
藤田作彦
材料工学要論　日新出版
渡谷井一
現代材料力学　朝倉書店
駒井武夫
初級技術者のための材料力学演習　培風館
小野昌孝
複合材料のおはなし　日本規格協会
吉川　光
おはなしIE　日本規格協会
土屋　裕
おはなしVE　同
斎藤喜三郎
おはなし信頼性　同
阪口　理
新体系土木工学　15　土質調査法　技報堂
Scalzi
Construction and design of
cable—stayed bridges　Wiley
Wittfoht
Building bridges　Beton
小平正雄
はねのおはなし　日本規格協会
鎌林英一
ベアリングのおはなし　同
JISハンドブック　ポンプ　同
長岡金吾
機械材料学　工学図書
江守一郎
機械のはなし　技報堂
千塚俊一
冷凍機　共立出版
沼野正博
図解熱エネルギー工学入門　オーム社
中島保男
自動車材料　明現社
小熊　正
エンジンの設計製図　パワー社
大西　清
JISにもとづく機械製作図集　理工学社
高合　泰
総説機械材料　同
秋葉鎮二郎
宇宙開発近未来　岩波書店
佐藤剛明
電気機器とパワーエレクトロニクス　昭晃堂
二村良彦
プログラム技法　オーム社
森田幹郎
電子工学のための複合材料　電子通信学会
田丸啓吉
ハードウェア技術　オーム社
斎藤忠夫
計算機アーキテクチャ　同
九山　武
ソフトウェア構造　同
日本電信電話公社
図説電子計算機　同
アシュロフ
基礎FORTRAN　77　啓学出版
永瀬輝男

パソコンPascalプログラミング　東海大学出版会
伊藤貴司
必ず理解できるTURBO PASCAL　秀和システムトレーディング
釜江尚彦
ビデオテックス　オーム社
電気学会
半導体電力変換回路　電気学会
持田術宏
ディジタル信号処理システム　東海大学出版会
上林彌彦
データベース　昭晃堂
市原敬雄
ワークステーション　オーム社
野田健一
光ファイバ伝送　電子通信学会
木村英紀
ディジタル信号処理と制御　昭晃堂
松村正清
半導体デバイス　同
松田　稔
インターフェイスの使い方　日刊工業新聞社
中前栄八郎
コンピュータグラフィックス　オーム社
小川伸郎
新しいPLL技術　同
樋渡潤二
ビジュアル・コミュニケーション　共立出版
生駒俊明
エレクトロニクスのすすめ　培風館
中前栄八郎
3次元コンピュータグラフィックス　昭晃堂
樋渡潤二
画像工学ハンドブック　朝倉書店
青木昌治
オプトエレクトロニックデバイス　昭晃堂
テキサスインスツルメンツ
光エレクトロニクス素子とその応用　マグロウヒル好学社
ガグリアルディ
光通信システム　同
マコーダック
コンピュータは考える　培風館
オハンロン
真空技術マニュアル　産業図書
岩崎　裕
半導体物性レクチャート　日刊工業新聞社
加山延太郎
鋳物のおはなし　日本規格協会
手塚敬三
溶接のおはなし　同
千々岩健児
鋳物の現場技術　日刊工業新聞社
菅野友信
ダイカスト技術入門　同
日本強靭鋳鉄協会
低周波誘導炉による鋳鉄溶解作業　同
日本鋳物協会
精密鋳造法　同
岡部平八郎
界面工学　共立出版
小石真純
粉体の表面化学　東京化学同人
永田宏二
接着のおはなし　日本規格協会
植木憲二
塗料のおはなし　同
ベア
燃焼の空気力学　省エネルギーセンタ

芸　術

村越愛弦
図記号のおはなし　日本規格協会

語　学

山本貞三
日本語ワードプロセッサ　オーム社

文　学

昭和文学全集　10、15、16、18、20、21　小学館
野上彌生子全集　4、5、6、19、20　岩波書店
寺田寅彦全集　文学篇　18　同
森　鷗外
舞姫　うたかたの記　ほるぷ
国木田独歩
武蔵野　春の鳥　同
夏目漱石
三四郎　同
田山花袋
田舎教師　同
石川啄木
悲しき玩具　我等の一団と彼　同
森　鷗外
牛タ・セクスアリス　雁　同
武者小路実篤
お目出たき人　友情　同
夏目漱石
明暗　上下　同
志賀直哉
暗夜行路　前篇後篇　同
宮本百合子
伸子　上下　同
横光利一
春は馬車に乗って　日輪　同
葉山嘉樹
海に生くる人々　同
梶井基次郎
檸檬　同
芥川龍之介
河童　或阿呆の一生　同
林　芙美子
放浪記　同
中原中也
山羊の歌　在りし日の歌　同
石川　淳
普賢　焼跡のイエス　同
高見　順
如何なる星の下に　同
中島　敦
山月記　李陵　同
太宰　治
桜桃　人間失格　同
川端康成
山の音　同
谷崎潤一郎
少将滋幹の母　同
福永武彦
亀　廃市　同
島尾敏雄
夢の中での日常　死の棘　同
安岡章太郎
悪い仲間　海辺の光景　同
上竹瑞夫
籠略　読売新聞社

昭和62年度　図書委員会委員

館長	山崎數彦
副館長	渡辺洋太郎
機械工学科	中山淳一
電気工学科	奥村陽彦
工業化学科	青柳克弘
土木工学科	志賀宣郎
庶務課長	浜中利三
図書係長	加藤勇

視聴覚機器担当者

機械工学科	渡辺興仁
電気工学科	石田俊一
工業化学科	芳賀俊彦
土木工学科	江尻勝紀
一般教科	江尻日出夫

学生委員

	機械工学科	電気工学科	工業化学科	土木工学科
1年	小澤　健 小野　光	遠藤　貴子	黒山　浩之 佐藤真知子	永山慎之介
2年	長谷川はやと	神田　敏和	草野　素子	馬上　智明
3年	川瀬　弘高	四家　靖 須藤　隆士	安斉　崇王	金成　克弘 今野　一也
4年	卯ノ木由次	永山　昌徳 渡部　光男	渡辺　和彦	中山　康士
5年	結城　広之	斎藤　利幸	四釜　祥弘	小林　克久